

GAZORT

いろはにぼうし

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界にヒーローはない。

悪意によつてゆがめられた彼女は、トモダチを喰らう獣となつた。

※ウルトラマンティガに登場する変形怪獣 ガゾートを元ネタにした短編です。  
残酷な描写や暴力表現が多数ございます。苦手な方はご注意ください。  
また、微妙に違うような気もしますが、擬人化表現があります。  
あくまで元ネタにしただけなので、本編のガゾートとは誕生の経緯、設定が大幅に違  
うほか、ウルトラマンティガの世界観ともほとんど関係がございません。  
ご了承下さい。

G  
A  
Z  
O  
R  
T

目

次

1

# GAZORT

突然だが、皆はヒーローと言う存在についてどう思うだろうか？遠い場所から、あるいはとつても近い場所からやつて来て、悪者をやつつけて去つていく。

見返りを求めず、決して理解されない。自らの正体を明かさない。優しさに溢れ、悪意に晒されながらも、心の光を失わない。そして、いつも皆を助けてくれる。正義のヒーロー。皆の憧れ。

まあ、この話にはヒーローなんて出てこないのだけれど。

某国某所。夜。

月が赤く輝く夜。

吹きすさぶ風に、紫の髪を揺らす少女は水色のマフラーを口元に当てた。

(寒い…)

少女は夜中に、それも人通りの少ない廃墟を歩いていた。

ちかちか、と点滅する壊れかけの白熱街灯だけが道を照らしている。あの電灯が光を失うだけで、この廃墟は完全な暗闇に包まれるだろう。それでも少女はその道を選んで歩いていた。

否。彼女は選んでこの道を歩いているのではなく、選べない故にこの道を歩いているのだ。

彼女に選択肢はない。

どうしたつて彼女は、人の居ない道を歩く必要があつたのだから。

それは数年前の事。

地球上に1つの隕石が飛来した。

それは本当に本当に小さな小さな隕石だつた。

遠くからそれを見た少年は流れ星を無邪気に喜んだ。

近くからそれを見た少女は落下した隕石を見物しにやつってきた。

遠いか、近いか。

少年ももし落下地点の近くに住んでいたなら、その隕石を眺めに行つただろう。少女ももし落下地点から遠く離れた地に住んでいたとするなら、手を合わせて祈るだけにとどまつただろう。

少年にとつての取るに足らない一日は、少女にとつて悪夢の始まりだつた。

隕石を眺めに行つた先で少女を待つていたのは、黒い帽子をかぶつた背広姿の男だつた。隕石のすぐ近くに立つていた彼は、少女を見てにつこりとほほ笑んだ。

微笑が、とても似合わない顔だつた。

『やあ、お嬢さん。君も隕石を見に来たのかい？』

警戒する少女に、男は声をかけた。

『怖がらなくていいよ。君は隕石を見に来た。私は君を待つていた。それだけの事じやないか』

『私を、待つていた？』

隕石ではなく、私を？

隕石の落下は事前に宇宙観測センターから告知されていた。だからもし男が『隕石をまつていたんだ』と言えば、少女もまだ警戒心を解いただろう。しかし、目の前の男は、それを許さない程度には奇怪だった。

機械的なまでにぶれない奇怪さだった。

『いやいや、隕石のことだつて、私は待つていたよ？ 珍しい事なんだ。電離層に住む彼らがこんな隕石になつて地上に来るなんて。私の知つている彼らとは色も異なるし、もしかすると本当に別の星から来たのかもしれないね』

そう言つて、男はまたほほえんだ。微笑み過ぎて、口が裂けているようだつた。

少女は恐ろしくなり、逃げ出そうとして。

振り返つた瞬間、男に胸倉をつかまれた。

『駄目だよ、話は終わつていないんだ。お母さんに、大人の話はちゃんと聞きなさいと教わらなかつたかな？』

男はそう言つて拳を握り。

少女の腹を思い切り殴りつけた。

『が、は——』

激痛が走る。肺の中の空気ごと、内臓が口から出ていく感覺を覚えた。  
思わず口を開けた少女に、男はまたほほえんだ。

『H a p p y b i r t h d a y, ■■■■■』

男が少女を殴りつけた手を、こんどは少女の口の中に突っ込んだ。

『お、え』

驚くほど、声が出なかつた。

それもそうだ、口が手でふさがつていてるのだから。

否、少女の口を塞いでいるのは手だけではない。

男が、少女に何かを飲ませていてる。

じゆるり、と、得も言えぬ不快感が少女の喉を通過していく。

(嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だイヤダイヤダ!! 私、何をされてるの!?)

男が少女の口から手を引きぬいた。

手に付着した粘液が、糸を引く。

『ああ、ガ・ア・ア・ア・ツ!?』

次の瞬間、少女の体に異変が起こつた。

身体の奥が熱い。

何かが変わる。内側から変わる。

少女を人間足らしめている何かが、バツクリとわれる。

少女が何かに食われていく。

『さあ、トモダチ百人できるかな?』

その言葉が、少女の記憶している最後の記憶だつた。

それから数年。少女は少女の姿のまま、けれど何かが決定的にずれたまま今日にいた  
る。

ひたすら人を避ける。  
ひたすら孤立する。

それが少女が体内に飼っている『獣』に対する、現状とれる唯一の抵抗だつた。  
けれど、運命は残酷だ。

彼女の前に、いつも極上の甘味を置いて行く。

それは悪意か。

否、当たり前の話。

彼女が彼女である限り。

彼女が彼女で在りたいと願う限り。

運命はいつも彼女を殺しにかかる。

くちゅり、くちゅり。ぐち。

彼女の耳が、廃墟の片隅からの異音を捕えた。彼女は導かれるようにその音の方向に歩いて行く。

一步、また一步。

暗闇と瓦礫を踏みしめて歩いた先にあつたものは。

ちぎれた女性の腕を食べる、一体の異形の姿だつた。

『ンまあいなあ＝美味しいなあ』

異形は、暴竜の姿を取つていた。頭にヘルメットをかぶつっていたが、割れたバイザー部分から見える顔は、鋭い牙に暴虐の目を備えていた。その癖、話す言葉は妙に知性的だつた。

異形はしばらく憑かれたように誰かの腕をしゃぶっていたが、ややあつて彼女に目線を剥けた。

『おんやあ、ウマそうな女がいるぞお』お前は俺たちの仲間か?』

「ううん、ただ通りかかっただけ」

『ウマそうだ、ウマそうだ』臭うぞ、君からは俺と同じ匂いがする』

異形は涎を垂らしながらケラケラと嗤つた。

『オマエを喰いたいなア』まさか人間じやないだろうな? なんだか妙な感じだ』

『人間だよ、私は。たぶん』

『うれしいなア』そうか?』

『ねえ、コレ、君がやつたの?』

彼女は積み上げられた瓦礫と、当たりに飛び散った肉片、人間だつたものを指さして尋ねた。

『ぐひひひひ』『そうだよ? まあ構わないだろう。君はコツチ側だ。唯の人間のことなど気にしないでくれよ』

「そう」

「じゃあ、あなたが今日の『トモダチ』ね」

彼女が『変わる』。

マフラーが風に乗つて飛ぶ。

紫色の髪は逆立ち、美しい琥珀色の瞳が、獰猛な輝きを宿して金色に。マフラーで隠していた、ふつくらとした桃色の唇が、頬まで裂けた。

歯が全て抜け落ち、鋭い牙は現れる。

変態する。

肩の皮が裂ける、服を突き破る。飛び出た骨が高質化して、黒い体表が現れた。胸部から腹部にかけて変色し、灰色の表皮に包まれる。無数に浮かぶ黄土色の斑点が、涙をこらえる子供の顔のように歪んでいた。

『ナンダ、ナンダナンダ!?』やつぱり同業者か? ほら、君も喰えよ』

異形は自らと同種の生物と出会えた嬉しさからか、食べていて女性の腕を彼女だつたものに差し出した。

彼女だつたものはその腕を黄色の眼で見つめ。

ぶちん、と。

差し出された男の右腕を食いちぎつた。

『イギイイイイイイアアアアアアアアアアアアアアアツ!』

ぶち、ぶちん。

彼女だつたものは異形の腕を口の中でも咀嚼する。

その表情には悦が入つていた。

『ナニスンダ、ナニスンダ!!』テメエエエツ!? 仲間だろうがアア、俺達はよおオオオオ  
!!』

『トモダチ、トモダチ』そうネ、仲間ダわ、トモダチだわ、私たチ』

異形の腕を呑みこみ、彼女はゆつくりと歩を進める。

一步、一步。彼女のトモダチの元へ。

『サミシイ、タベタイ』トモダチは、大事ニしたいノ。だから、私ハ人間ノ前には行かナイ。私が、人間でアルために』

一步、一步、人から離れていく。

『トモダチ、ゴチソウ』デモ、それだとお腹が減つテ耐えられないから。だから』

『  
■  
■  
■  
■  
■  
■  
ノ、タベモノ！』私は、  
獸を食べる人間ニナル』

「また、服ダメにしちゃつたな：」

月夜の静寂。幾回の悲鳴を終え、彼女は元の姿に戻っていた。風に乗ったマフラーを見つけだし、首に巻く。

変態の際に体の骨格が変化するので、服は全て破れてしまつていて。

彼女は目を閉じて自分の腹部に、まるで慈しむように手を当てた。

『トモダチ、ゴチソウ！　トモダチ!!』

「そう。まだ足りないの？」

『トモダチ、トモダチ！』

「…まあ、これでいいか」

彼女は廃墟に落ちていたボロ布を体に巻いた。素足だからか、瓦礫だらけの大地を歩くたび、すこし痛い。

一歩ずつあるくこの足が、なんだかとても痛い。

「…む、いけない」

彼女はペッ、と口から何かを吐き出した。

黒いガラス片、先ほどまでヘルメットの一部だつた物だつた。

「行きましょう。人間を守らなくちゃ。私が人間であるために」

彼女は歩く。裸足の足で。

人間であるために、人の道から外れ続ける。

作られた彼女は、同族を喰い続ける。

彼らはトモダチで、人間は友達だから。

その先に救いは無い。

彼女は人間に殺される。

その生涯を通じて、何も守らず、何も取り戻せず。

ただ惨めに死んでいく。

彼女は何を残すのか。

決してヒーローになれない彼女。

怪しい獣になつてしまつた彼女。

彼女の名は、

〔GAZORT〕。